



世界の三大美女??と言われることで有名で、こんなにしたたかな政治家だったとは思わなかった。親子、兄弟、姉妹の骨肉の争いや、エジプトの女王として女性を武器のローマの武将・シーザーとアントニーをパートナーとしてエジプトの安泰と勢力の拡大を目指して、戦い挑む姿はさすがに女王クレオパトラと感じ入る。

クレオパトラが7カ国語と使い、知識の深さとプトレマイオス朝? (クレオパトラ家) の蔵書(70万巻)にも驚いた。この中で旧約聖書のモーゼの五書もあった。クレオパトラの死没が紀元前30年だから不思議ではないが私も読んだ旧約聖書がクレオパトラも読んでいたことになる。また、このような図書館の蔵書は奴隷による視写という。奴隷とは? 市民の1/4?ということは、今で言う、労働者階級?? この頃の経済は? 土地は国王や制服者の物であり国民に貸し与えているという感覚で作物は持ち主返すのが当たり前という感覚なのかと思う。

クレオパトラはシーザーとアントニーと組み、作戦練り果敢に戦いを挑むけれど最後は4人の子ども、共々非業のしをとげる。小説としては上巻だけでよかったも? 初め良くてやがて悲し・・・では・・・。日本が弥生時代半ばという時代にこんなに発達した文明の中でこんなに激しく生きた一人の女王のドラマとしてはいいのかな??

世界の女王、ロシアのエカテリーナ宮殿へ行ったことがある。夏の宮殿、冬の宮殿とあり、世界中の財宝を集めた様は宝物類、目を見張る建物と室内の装飾。これを見ていた、ある裕福そうな婦人が「マー。なんと! これだけ集めりゃ革命も起こるわな!」周りのものも笑いながら頷いていたのを思い出す。また、フランス革命でギロチンにかけられたマリーアントワネット王女。そこまでやらなくても・・・と思うが、数年前に行ったベルギー中心部の公園に将軍か誰かの首の銅像がゴロンを転がっていて、私はギョッとしたけれど、市民は違和感をもっていないのだろう。

クレオパトラ女王という華やかな部分と4人の子どもの非業の死は母親として耐えられなかったと思うと陰の部分と陽の部分のあまりの大きさを改めて思う。